

利用者が生活を実感できる公的福祉サービス

藤 田 雅 子

User Should Feel Worth Living through Social Service

Masako Fujita

はじめに

この論文は、全国社会福祉協議会と日本福祉施設士会の共催による第14回全国福祉施設士セミナー「福祉サービス改革のシナリオ：公的福祉サービスの限界をいかに越えるか」での講義である。日本福祉施設士会とは、全国社会福祉協議会における社会福祉施設等協議会連絡会のうち、専門職員組織関係に属し、社会福祉施設長等施設管理者の組織である。

会場はダイヤモンドホテル（東京都千代田区一番町）、期日は1992年11月26日である。

1

「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。」

土佐日記の書き出しの文章。作者、紀貫之は男性で三十六歌仙のひとり。男性主導型の福祉施設経営に、「女もしてみむとて、するなり」の紀貫之スピリットがほしい！

(レジュメの1.)

日本の生活と幸福を率いる社会福祉施設のトップの方のお集まりで、お話をさせていただき機会を得ましたことを大変に嬉しく感じています。それからもうひとつ、お礼を申

し上げなくてはならないことがあります。それは、女の言い分も聞いてくださるというご配慮に対する感謝でございます。このダブル・ラッキー・チャンスにあらためてありがとうございます。

二番目の御礼の中身についてですが、女の言い分を聞いていただけるなどという表現をしますと、卑下しているようですが、逆で、女のやっている日常茶飯事の価値を自負しているわけで、その自負する部分を聞いて下さるというのですから大変に喜んでいられるわけです。そしてたぶん現代の社会福祉のポリシーとフィロソフィーに、女が現在、担っている日常茶飯事をたっぷり盛り込んで下さるのではないかという期待も抱いております。

そこでレジュメの第一に上げておきました、紀貫之さんに登場していただくこととなります。御存じ、紀貫之は平安時代前期の歌人で、三十六歌仙のひとりですが、私が気にいっているのは紀貫之の土佐日記で、とくに「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。」という書き出しの文章ってすばらしいなと感じています。

「男が書くと聞いている日記というものを、女の私もやってみようと思って、書くのである」という、紀貫之スピリットが、今日の社会福祉の精神に欲しいと望むからです。当時は、男性の日記は漢文体で書かれ、公的なも

のであったそうですが、女性の筆に仮託したことにより私的、文芸的な要素を取り入れ、漢文で示しえなかった心の機微を仮名文字で表現することに成功したそうです。これは王朝女流文学を完成させるのに影響を与えたといわれております。

漢文を仮名文字にしてみる心意気は、ハードを重視する男性のポリシーにソフトを大切にする女性のフィロソフィーを吹き込むことに成功するかもしれません。ハードとは建物や運営、ソフトとは生身の人間の生活と表現してもよいでしょう。紀貫之の土佐日記が王朝女流文学の完成に貢献したように、現代の土佐守こと紀貫之である施設長さんが、「男もする日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。」という精神を、実践に移していただければ、日本の福祉を管理から生活重視に大きく流れを変えられるのではないのでしょうか。

そこでレジュメに、男性主導型の福祉施設経営に、「女もしてみむとて、するなり」の紀貫之スピリットがほしい！と切実な願いを込めて書きました。

2

「揺りかごから墓場まで」を実感するのは誰？

幼いわが子は保育所で、老いて自身は老人ホームで暮らすだろう、と思うのは女。子どもは女房が世話し、自分の最期も家内が看ってくれる、と疑わないのは男。

でも、福祉を利用するのは、男性も、女性もの時代です。

(レジュメの2。)

本日のテーマは「利用者が生活を実感できる公的福祉サービス」ですが、漢文ではなく

仮名文字でお話をさせていただきたいと思います。

ところで生活を実感するとはどんなことなのでしょう。

女房の手料理で一杯やりたいとよく言います。あるいはおふくろの味が懐かしいと言います。はじめっから多くの男性は料理なんて作る気はないんですが、他力本願でも何とも思わない。私は子育てをほとんど卒業したので、仕事柄外を歩く機会が多くなったのですが、国内でも数日外食が続くと、自分の調理した食事がしたくなります。ですから帰宅するやいなや好みのものを自分で作ります。この際、自分で調理をするしないは、ちょっと別にして考えますと、私たちは男も女も自分らしい食事をしたいのです。

食生活は生きる基本ですから、私は、国の内外を問わず、施設でもご家庭でも、訪問の際、たいてい台所からスタートします。もちろん衛生上の問題で台所に入れない場合もありますから、調理法やメニュー、価格について質問をし、できれば試食させていただきます。デンマークのフィヨルドを臨む、老人アパートで賞味させていただいた朝食の味は忘れられません。

先月(1992年10月)も、知的にハンディのある方々の通勤寮とグループホームのスタッフに、献立はもちろん、食物の種類、栄養、価格、調理法、燃料費、食事の雰囲気作り、さらにどこからどのように仕入れるのかなどについて詳しく尋ねていましたら、スタッフの方に「先生は食品が専門ですか？」と質問されてしまいました。一日、光熱費込みで980円なのですが、お弁当を含む、三食がカロリーや栄養のバランスもきちんと、盛りつけの彩りも美しくできるのです。そこでは、障害の方の自立生活を地域でサポートしているすばらしいパイオニア的活動を裏づけるかのように、人間生活にふさわしい食生活がありました。

施設の中には、悲しいかな、逆もあり、食品の数も少なく、盛りつけも悪い、食器も汚い。選択の余地もなく3食を食べさせられる入所者の立場を考えたことがあるのかなと思います。ここで具体的に申し上げるのは差し控えて、その代わりに、ちょっとだけODAの関係についてお話してみたいと思います。

私は後開発途上国の福祉に関心を抱き、最近立て続けに3回バングラデシュを旅しています。生活に密着した福祉の向上には女性の解放が前提ですし、バングラデシュは社会福祉以前の状態ですから、女性の活動について見聞きする方向に転換しました。ダッカの郊外に農業に従事する女性のための日本のODAで建てられた研修所があります。素朴な農村地帯にそぐわない日本式の近代的な建物が建っていました。その建物にふさわしくシステムキッチンを備えた、これまた近代的な台所がありました。これを皆さまは素晴らしいと思われますか？ どうでしょうか？

内心すばらしいと思われた方には、合格点を差し上げられません。と申しますのは、この台所は現地での生活、とりわけ食文化と掛け離れているのです。こんなものは無用の長物、使い物にならないだけでなく、台所は毎日の生活に欠かせませんから困ってしまうのです。その建物が周囲の環境とミスマッチであることのシンボリックな現象が台所です。研修生たちは小バングラ的施設を作りました。それは食物を煮炊きする伝統的な台所を、敷地の片隅に作ったのです。

設計をした人に後ほど東京で会いましたが、やはり男性でした。台所の件を持ち出したら、彼は「バングラの水準が日本に比べて低いからですよ。」と善意あふれる日本男性の顔で言いました。バングラデシュの農村の台所をちょっとのぞけば、燃料を初め、使用する調理具、建物の構造、家族関係、その他が見えてきて、あんな日本の台所がまるで役に立たないことくらい分かるはずですよ。その

気になれば、30分、いや10分で理解できるはずですよ。私見ですが、途上国援助は国内福祉の延長線上にあると思います。

台所から見ますと、玄関からは見えない生活が分かります。台所にいて嗅ぐ香りは、生活の香りです。ただよほど親しくしないと台所に入れていただけませんので、まず人と人の絆が大切です。玄関で会う顔は心理的に距離がありますが、台所で、食物をはさんで会う顔は仲間の顔です。

そこで私は思うのですが、長生きして社会福祉施設で生活をするようになったら、週に何回かは自分で食事を作りたい。そのためには、ミニ・キッチンが部屋に付いていて欲しいですね。「わたしや若い頃、バングラデシュの台所で教わったベンガル料理が食べたくなった。孫が来るので一緒にちょっと作ってみるか。車椅子がシンクに入るから、便利じゃのう。」なんて言いながら、私個人のニーズも満たされる施設になっているといいと思うのですが、2、30年後の見通しはいかがなものでしょうか。

ところでノーマライゼーションという言葉がさかんに使われますが、家庭においてふつうの生活ができるのは、女性が家庭内のノーマライゼーションを支えているからではないのでしょうか？ 私は、最近気になることがあるのですが、話題になる女性を紹介する新聞記事などを読んでいますと、「夫の母親を看取り、現在は何十何才になる実母の看病しながら、こんな偉大な仕事をしている、云々」という書き方が目立ちます。当事者の女性はすごい方だと推察します。大変なご苦労と努力だろうと思います。

しかも家庭での顔は、一男二女の母としての役割を果たしているなんて書いたりします。女は子どもを産んで育てて、年老いた親の世話をし、一人前というお墨付きが出るんですね。ところが男性が子どもを産まないというのは第23対目の染色体の単なる結果ですよ。

で、これは生物学的区別なわけなのですが、父親としての男性は、ご自分の遺伝子をたっぷり含んだわが子の育児を放棄しようが、息子としての男性は、ご自分が遺伝子をたっぷりもらい受けた老親の介護を妻に任せようが、生活にかかわる一切を放り出しても一人前の男性として認められるのです。掃除、洗濯は関心外です。女性が、男性と同じことをやったら、一人前どころか、鬼のような母親、悪妻の見本のごとく言われ、あれじゃ亭主がかわいそうだと男性は同情される特典までお持ちです。

これからの社会福祉は女性の社会進出とおおいに関係がありますから、男女雇用機会均等法や育児休業法の運用も気になりますが、男女の価値のアセスメントも問題であると思います。

福祉のターゲットは、おんな、子ども、高齢者だけではなく、企業マンも視野に入れなくては国民のための、地域に根差した福祉にはなりにくいのではないのでしょうか。ちょっとお話が飛びますが、男女の価値観の違いを感じるのが、企業です。じつは私は非常勤で産業カウンセラーをやってしまして、企業と福祉の歩み寄りを切実に願わざるをえません。先週の土曜日に東京都の関係で「過労死：企業戦士のうしろ姿—会社主義日本のゆくえ」と題する催しがありまして、過労死110番の弁護士さんとご一緒にお話しの機会を得ました。企業のカウンセラーをしていても、「私はワーカホリックでしょうか。働き過ぎでしょうか。」と心配してカウンセリング室を訪れる企業戦士は皆無です。それよりも、出社拒否、サンドイッチ症候群と呼ばれる昇進性鬱、大人になれないピーターパン君、OA 機器導入によるテクノストレス君などですから、「昼間のパパは男だぜ」なんていう人々にとって産業カウンセラーは別世界に棲息する異星人のような存在です。自分の健康管理は妻まかせ、あるいは自分の健康すら管理できな

いで猛烈に働くのは、過剰適応という名のスピード違反で信号無視なのですが、これを中年暴走族と呼ばないのは、会社に対する忠誠という大義名分があり、社会悪ではないからです。

ですから私自身は過労死予備軍に会うことはないわけで、この催しへの出席を一度はお断わりしたのですが、この催しのタイトル「過労死」の後に、私が産業カウンセリングをまとめた本のサブタイトルの「企業戦士のうしろ姿」をついていますし、「会社主義日本のゆくえ」を探るならと、押しの強さ負けて引き受けたわけです。

長時間労働は問題ではあるが、働きすぎて死を招くというよりは、それ以前に出てきている心身の危険信号をキャッチできない、キャッチしても働き続けること、妻まかせあるいは他人まかせの健康管理が問題ではないかと、指摘したところ、フロアから「自己の健康管理を持ち出すのは、過労死した死者をむち打つことになり納得できない。」というお叱りがありました。やはりここに座るのではなかった強引にお断りすればよかったと、後悔しましたが、時すでに遅く、私は死者にむち打つ極悪人にさせられ、さんざんでしたが、それほど事態は緊迫しているのかもしれませんが、過労死した方はお気の毒ですし、残された家族が裁判で争わなければならないのは大変だと推察しますが、私が申し上げたいのは、自己の健康管理も思うにまかせないのであれば、家庭のことなどにかかわる余裕などないわけです。ここまで「男は外、女は内」が徹底していることも問題にしなければならないと思います。

男女雇用機会均等法が成立して七年を経過し、女性も男性並に管理職というポストを目指して壮烈な戦いを開始した方も少なくありませんが、女性には家事を引き受けてくれ、育児を担当してくれる奥さんがいませんし、ましてや健康管理をしてくれる妻もいないこ

とはよく分かっています。ですから企業戦士としての戦いに挑みながらも、躊躇し、家族と自分を見つめる目をもった女性が多いわけです。先々週の土曜日は、地方都市で「働く女性のメンタルヘルス講座」という催し物があって出かけましたが、様々な職種の、しかも管理職を含む女性が50名ほど集まりました。ふつうを保とうという意気込みの現われです。男性の企業戦士はこんな講座なんかやりません。企業が課長研修などで集めるのがやっとで、それだってしぶしぶで、ましてや休日をそれに当てようなんて考えません。

ところでなのですが、猛烈に働く男性も、猛烈に働かない男性も、過労死寸前まで働く男性も、時間を持てあますほど暇な男性も、いろいろな意味で自己管理ができずに、自立できずに、うっかりする自爆してしまう方々が多いのです。この「男は外、女は内」の男論理を生活福祉を標榜するこの社会に持ち込まれるのは大変に困ることなのです。自爆の巻き添えによる犠牲者はサービスを受ける利用者だからです。生活は他人に管理されるものではなく、自己のアイデンティティとの一致が問題であるからです。

そこでレジュメの2、「揺りかごから墓場まで」を実感するのは誰？ という箇所につながるのですが、幼いわが子は保育所で、老いて自身は老人ホームで暮らすだろう、と思うのは女ですが、ところが子どもは女房が世話し、自分の最期も家内が看てくれる、と疑わないのが一般的な男の姿です。

でも、福祉を利用するのは、男性も、女性もの時代です。ノーマライゼーションを求めるのは、日本語に直せば、ふつうの生活を求めるのは男女共に求める時代なのです。

福祉を創るのも、男性も、女性も、の時代ではないと思います。私、最近、よい実践をされているという情報が入ったり、あるいはは会合などでお会いしてこの人はすばらしい、という印象を持ちますと、なるべく現地に何

**「由良のとを わたる舟人 かちを
たへ ゆくへも知らぬ 恋の道か
な」**

櫓かいを失ったまま、ゆくへの知らぬ、従来の福祉の潮に流されずに、両性の共同作業として、失った櫓かいを取り戻したいものです。

いくら恋の道は厳しくとも、福祉を築くのは、男性も、女性もの時代です。

(レジュメの3。)

うようにしています。バングラデシュの不便な田舎に行くことや、物価の高い北欧に飛ぶことを考えれば、この便利な日本のことですからどこへ行くにもそんなに大変なことではないからです。もちろん、ごく限られた行動半径でしかありませんので、一般化しないで、幸せな福祉利用者を夢見るおばさんの印象としてお聞きください。

何とかの陰に女ありといいますが、なぜ、こんなすばらしいことができるのと感激感動する画期的な福祉実践の牽引力、原動力は女性なのです。この場合は、陰なんかではない、堂々と発言し実践するたくましく、したたかで、やさしく、美しい女性なのです。よく考えますと女性だからできるというのではなく、女性が家庭内の育児、看護（共働きで、子どもが病気をして仕事を休むのはたいてい妻です）、掃除、洗濯、食事の支度などをやってきていて、家庭を維持し、男性を支えて、家庭内のノーマライゼーションに尽くしていたから、リーダーシップをとり、パイオニア的な力のある女性が福祉を実践したとき、すばらしい人間味あふれる実践が展開できるわけです。

たまには、女性だけじゃない、やっぱり男

性も「お主やるなあ」なんて胸のうちにつぶやくと、すばらしい男性の実践の陰にまさに女あり、なんですね。ちゃんと生活実感をもたれたすばらしい女性がいらっしゃる。たいては、妻という立場で、相思相愛のご夫婦が『福祉丸』を操縦しておいでなのです。現代的山内一豊の妻の働きは大きいようです。妻ではなく、ごきょうだいの女性という場合もあります。このような方々の場合、染色体の第23対目が単に生物的違いであるにとどまり、お互いが主従関係ではなく、役割分担はあるものの、バランス感覚がよく、対等に意見が言える立場でいらっしゃいます。また人権感覚がすぐれています。

そこでレジュメの3. にありますが、百人一首のなかに「由良のとを わたる舟人 かぢをたへ ゆくへも知らぬ 恋の道かな」という一首があります。私は現在の福祉を考えると、必ずこれを思い出し、櫓かいを失ったまま、行方の知らぬ、従来の福祉の潮に流されていってしまいそうな不安にかられます。

しかし今、お話しましたように、女性が、あるいは男女のカップルがノーマライゼーションがピチピチとびはねているような福祉を実践して、そこで生活する人々がノーマライゼーションの空気を胸一杯吸っている現実を目の当たりにしますと、「由良のとを わたる舟人 かぢをたへ ゆくへも知らぬ 恋の道かな」といっているわけにはいかず、個々の福祉施設が輝かしい実践をしているのを、社会に広げ、男女という両性の共同作業として、失った櫓かいを取り戻し、いくら恋の道は厳しくとも、人間として尊厳の保たれる生活福祉を築くのは、男性も、女性も、という時代ではないかと思うわけです。

レジュメの4. にあります福祉って、生活支援ではないのでしょうか、という箇所に入っていきます。女房の手料理が食いたい、おふくろの味が懐かしいという、他力本願がちょっと気にいらないという点を除けば、その願

福祉って、生活支援ではないでしようか

家族が絆で結ばれる、暖かい三度の食事、清潔な身体、外出の機会、おしゃれ気分の満足、ゆっくり眠れる寝室、親戚や親族のつき合い……これいれまで家庭内で、母が、妻が、嫁が要になってこなしていたことです。

(レジュメの4.)

いは理解できます。私は女性ですから、女房の手料理やおふくろの味なんて期待できませんから、先ほどお話しましたように、仕事の関係で外に出っぱなしになると、自分の料理が食べたくなります。私も職業人ですから、外での緊張した生活もまんざらではないけど、ゆとりのある、そしてくつろげるふつうの生活もしたいわけです。現在は、身体も動くし、経済的にもやっていますからそれができるのです。でもそれができなくなったら、パニックです。

心地よい日常生活を求めるのに、自助努力でやる気があるのか、最初から他力本願なのかの違いは大きいとしても、人間が求めることなんて、男女共に共通することが多く、福祉に求めるのは結局、ふつうの生活の支援ではないでしょうか。レジュメの4. に生活支援として書き出しておきましたので、ご覧ください。家族が絆で結ばれる、暖かい三度の食事、清潔な身体、外出の機会、おしゃれ気分の満足、ゆっくり眠れる寝室、親戚や親族のつき合い。まだまだあります。

これらはこれまで家庭内で、母が、妻が、嫁が^{かなめ}要になってこなしていたことです。

この主として女性が家庭内でこなしていたことを、福祉の中に取り入れていく方向が望まれるわけです。つまり生活支援です。10カ

年戦略の中にもホームヘルパーの増員計画がありますが、これが名称通りにゴールドに輝くにはマンパワーが求められます。しかも家庭内の家事や看護を外部に出前するわけですから、主婦を自認する人でしたら、家庭内の延長として仕事をこなせるはずですが、でもこんなおんきなことを言っておれるのも今のうちだけです。福祉専門職の配置が十分ではなく、定着が困難なのは目に見えています。

それは福祉先進国の状況を見ればすぐに気がつくことです。たとえば、スウェーデンなどでは地域型福祉に力を入れ出した頃は、中年の主婦をしていた女性の協力が得られ比較的うまくいったのです。ところが現在はどうでしょう。男女の平等が進み、女性の社会参加が進行し、すぐに公的な主婦業をやる女性はどこを捜してもいません。要するに、核家族化が進んだことによって家庭内でも家事や看護をこなせなくなっただけでなく、職業としてすぐに役立つ人材はいなくなったのです。必要とする質量の人材が得られなくなったのです。

そこでスウェーデンでは、高校生段階の青年層を福祉の人材として養成始めました。最近2年コースから3年コースに養成期間が延長されましたが、かなりますと「おふくろの味」どころではありません。たとえば家庭に向く福祉スタッフが生活の支援を受ける高齢者の孫どころかひ孫みたいな年代です。髪の毛を染めて、爪を赤くぬって出現し、おばあちゃんは腰を抜かさんばかりにびっくりしたなどという話もあります。若者文化と老人の価値観の対立ですが、福祉の人材は若者に求める以外に道はないわけです。

日本でも、主婦の価値あるはずの家事や看護の能力を、ホームヘルパーやグループホームの世話人として安上がりに使っていること自体が問題なのです。養成にお金をかけて、技術を教えこんでも、主婦が長年培ってきた家事と看護の能力を期待するのは無理な時代

がすぐにやって来ます。なにしろインスタントラーメンの世代の次は、電子レンジでチンの世代です。家事的な機能を担う人材の待遇改善が求められています。家庭においては評価されない主婦業は、本来は非常に高くつくものなのです。

公的サービスに限界を感じたとき、消費者は買う福祉を求めます。その代表がシルバー産業です。悪徳シルバー産業がマスコミで攻撃されたりして、これに対しては厳しい評価をしなければなりません。しかし産業ですから損失は出せないが、消費者である利用者の心をつかんで良心的に産業経営をしているシルバー産業もあります。もちろん利用者は、財産を処分してでも、必要経費が払える程度の財力のある人に限ります。最近子どもに財産なんか残す必要ない考える高齢者も増加していますから、家屋敷を処分するつもりなら、相当数の人がシルバー産業を利用できるのではないのでしょうか。

日本の社会事業のスタートは救貧にありましたが、社会福祉の時代になっても、基盤にあるのは生活保護法であって、これが憲法第25条に定める「健康で文化的な最低限度の生活」の国家的表現であったわけです。したがってつい最近まで、福祉にふつうの生活は許されず、それはぜいたくという評価でした。

ですから例えば知的にハンディのある人がふつうの家に住んで生活面でサポートを受けながら、仕事先に通うのは、ぜいたくであったのです。しかし現在は違ってきています。平成元年度から、グループホームの世話人さんの給与が国の予算になったからです。毎年、全国でたったの100か所ずつなので、まだ数は少ないのですが、ふつうの生活が知的にハンディをもった人もできるということが実証された現在、そこに生活する人々の顔が輝き、自己決定力が尊重されるようになって、自分に対する信頼を回復してきました。しかも結婚してアパートで十分に生活できる幸せカッ

ブルも生まれています。もちろん生活面でちょっとしたサポートが必要ですから、生活支援センターの腕の見せ所です。

しかし、まだまだ「健康で文化的な最低限度の生活」に、ぜいたくという名のふつうの生活は許されない傾向があります。したがって、福祉を買うという選択肢が出てきたのです。本来、誰もが平等にサービス、ケアに接近できるはずですが、ふつうがぜいたくであるという窮屈な公的福祉の世界に限界を感じたとき、家や財産を処分してでもシルバー産業を買える人が一方にいます。しかも厚生省は有料老人ホームを認めています。しかし限界を感じても、買うメニューのない人、経済的に福祉を購入できない人、あるいは自分の財産でありながら息子や娘に奪われ、結果的に福祉を買えない人々がいるわけです。

先日、私もある痴呆専門の有料老人ホームを訪問してみました。食事にこだわるようですが、配膳が美しいしおいしい。四季の葉っぱや花が添えられている。箸の袋にやはり季節の絵が筆で書かれています。食事にかかる費用も押さえている。ホームで生活していらっしゃるお年寄りの服装がきれいで、ちょっとしたおしゃれの雰囲気もあります。

内容を一つ一つ見て、聞いていきますと、有料だからできるというのではなく、施設長のフィロソフィーがゆきわたり、スタッフの独創性が尊重されているのです。もちろん施設長は女性です。お年寄りに対する言葉づかいが丁寧で、叱ったりする光景は見られません。スタッフがバタバタ、セカセカしていません。美しい庭園を造り、心をなごませ、スタッフが語りかけ、会話に応じています。

一部の特別養護老人ホームで見られるように、徘徊するお年寄りは心ゆくまで徘徊していただくなんて、実験用のはつか鼠のようにとめどもなくクルクル回る廊下なんかこの有料老人ホームにはありません。

公的サービスにおけるサービス・コストの

負担が問題になっていますが、この有料老人ホームでは、1ヵ月の費用が30万円です。介護料が15万円、生活に要する諸経費が15万円で、7年間をその有料老人ホームで生活するとなると、2500万円を要します。これが高いか安いかは、個人の考え方によって、評価は異なってくるでしょう。

5

「社会的弱者を救済する」から「生活者を支援する」へ転換

強者は管理者に、弱者は世捨て人になる危険から脱却するために。

他に方法がないので、仕方なしに施設を利用するという声が聞こえますか。

施設長は行動するフィロソフィー。

(レジュメの5。)

ある県の人権政策推進懇話会の専門委員をさせていただいているのですが、「社会的弱者」という用語が使用してあることに私はすごくこだわりました。同席していたベテラン弁護士さんが、別に法的には問題ない、とおっしゃるのです。私は福祉のサービスを受ける側の人権が必ずしも守れないのは、社会的弱者を救済するのが、社会福祉であるというような社会福祉を提供する側の意識が、生活支援の福祉サービスにまで成熟しないひとつの理由ではないかと考えてきました。法的にはどうであっても、実際の生活において弱者と強者の関係を肯定してしまう構図が定着してしまうことを懸念するわけです。

強者とは、弱者を管理することを意味しています。つまりサービスを提供する側と受ける側の間に主従関係が成立しますから、利用者は「ありがとうございます」「お世話になっています」という言葉を発しはしますが、

こうしてほしい、こんなところを改善してほしい、というようなニーズを要望として口にするのは憚らなければならないという事態も生じます。

医療の領域でようやく、やっとインフォームド・コンセントが患者の権利として認識されつつありますが、本来、福祉の利用者はサービス内容に関してじっくり説明を聞き、納得して、そのサービスを利用するというのが成熟した福祉社会の姿であるはずですが。家庭生活では、家族にかかわることは、家族のニーズを尊重し、一人一人が自己決定をして、家族の同意を得て、日々の生活が展開されているわけです。子どもも、夫婦も、お年寄りも、家族の関係はさまざまですが、互いに説明と同意を繰り返しているわけです。

福祉施設では、入寮体験や、入所体験、一日入園などを試みている施設も見受けられますが、これからこのようなインフォームド・コンセントの試みを増やしていただきたいものです。しかし誰に対してのインフォームド・コンセントかという問題があります。サービスを受ける本人なのか、保護者なのか、介護者なのかによっても違ってきます。レジュメにも書いておきましたが、いくらインフォームド・コンセントをしても、仕方なしに施設を利用するというのではむなしいものになってしまいます。こちらのセミナー委員会のご報告に、「事業メニューの企画、立案、事業の具体化」が掲げられていますが、生活支援を目指した事業メニューを推進していただきたいと思います。

先ほどお話しましたように、私は、非常勤で産業カウンセラーをやっています。こんなご相談がありました。子どもの世話をしなければならないが、30分のフレックスタイムが認められずに困っているというのが主訴でした。ご相談の主は、50才になったばかりの男性で、妻は精神分裂病のために長期入院中で、退院の見込みはないし、退院しても子どもの

世話ができる状態ではありません。長女が小学校六年生ですが、喘息があって、夜でも病院に連れて行かなければならないことがしばしばです。その下が、小学校四年生と三年生ですが、二人とも弱視で知能がサブノーマルです。通勤に一時間ほど要するのですが、この方の職場は現業部門ですので9時から仕事を始めるために、8時半に出勤していなければなりません。障害のある子どもたちを登校させるのに、30分の時差出勤を認めてほしいとおっしゃるのです。

上司は最初はそれを認めていたのですが、9時にも間に合わないことがあるものですから、それくらいならば、正規の出勤時間を守ってほしいと強硬な態度に変わったのです。以前、彼はお子さんがたを養護施設に預けたことがあるそうです。しかし子どもたちに「どんなことでも我慢するから家へ連れて帰って」と懇願されて、結局、再び父親が子どもたちの世話をしながら仕事も続けてきたのです。

私も、その30分の時差出勤がもう一度認められないのかといろいろ話し合いをしたのですが、「家で痴呆のお年寄りを抱えて苦労している社員もいる」「離婚して、女手で一生懸命に子育てをしている人もいる」、だから一人例外を認めたら切りがないということで、再度のフレックスタイムは認められませんでした。個人の家庭の事情や福祉的なことを会社に持ち込むのは御法度なのです。

それならば、子どもたちはウィークデイを施設で過ごし、会社は完全週休二日になっていきますので、週末は父親と家庭生活を営むのはどうかなと思ったのですが、このアイディアも実行不可能だと分かりました。施設が遠いし、不規則な施設入所は考えられないというわけです。おねえちゃんが喘息ですので、病弱教育養護学校に転校して喘息の治療に専念するのがいいのではないかと考えたのですが、病弱の養護学校に入るには併設の病

院への入院が原則ですので、父親はいくぶん子育てから解放されるものの、知的にふつうであるこの長女が下の子どもたち二人の世話をしているので、それもむずかしいのです。

福祉事務所では、「そんなに子どもの世話をしたいなら、会社を辞めて、生活保護を受けて育児に専念したらどうですか」と勧められたというのです。社会福祉では家庭を支援するという考え方はなく、日本の福祉の基盤であり、スタートの生活保護が持ち出されるのです。福祉事務所の方は、うるさく相談に来る、そして物分かりの悪い困ったケースとして見ていますから、こう言わざるをえなかったのでしょう。福祉事務所では、彼が満足する制度がないのですから、別に間違ったことを言っているわけではありませんが、彼は働く意欲も、能力も、場もあるのに、生活保護を受けて子育てとは情動的に合点がいきません。制度の利用者は本人と家族であるからです。

「子どもの権利条約」を批准した先進国では、児童の権利が守れない養護施設を廃止して、里親制度やグループホームに、そしてファミリーサポートシステムに切り替えています。先進国では日本だけが取り残されているのに、関係者に危機感がないことに危機感を感じています。

こうやって彼は追いつめられていきました。会社での人間関係も悪化し、孤立していきました。カウンセラーの私に「所長を銃で撃ち殺してやる」と絶叫に近い声で、電話してきたこともありました。「もう一家心中しかない」としょんぼりした声の電話も受けました。最近はいきなりあきらめたのか、ただ、カウンセラーの声が聞きたい、と言って時折電話をしてきます。家庭生活も、会社も心理的には四面楚歌の状態です。福祉の領域では、このような場合に他問題家族などという表現をしますが、複合的な福祉問題を抱える方を、産業カウンセラーはどうして差し上げることもできませ

ん。四方八方手を尽くしても満足の得られるサービスにはアプローチすることもできずに、状態は改善されずに、会社の人間関係の悪化だけが残っています。

したがって、レジメの5. に書いておきましたが、「社会的弱者を救済する」から「生活者を支援する」へ転換が求められるのですが、それは、強者は管理者に、弱者は世捨て人になる危険から脱却するために、どうしても必要なことなのです。

国民生活審議会は、「ゆとり、安心、多様性のある国民生活を実施するための基本的な方策に関する答申」をまとめましたが、政策や制度を個人の多様な価値観に基づく選択が可能となるように再編成するとともに、個人が尊重され、法人による個人の利益の圧迫のない社会の実現を目指すべきであると強調しています。

ちょっと以前にピーターパン・シンドロームという言葉が流行りましたが、ご記憶の方もいらっしゃると思います。大人になるのを拒んでいる青年を意味していましたが、同時にモラトリアムなどという言葉も使われ、つまり執行猶予の期間を引き伸ばし、社会に出ることを先送りしている青年たちを意味します。私たち社会福祉に携わるものは、これからの社会福祉サービスは生活支援であることに気づいているものの、この成熟した社会福祉サービスに踏み出すには思春期のような不安を抱き、社会福祉におけるピーターパン・シンドロームに陥っているような気がします。社会に受け入れられるような社会福祉にしなければならないことにも気づいているのですが、サービス提供側は、これまでの隔離型、施設型福祉に慣れてしまっていて、能率的で、居心地がいいものですから、先送りして、モラトリアム福祉に安住してしまっているという危機感を感じるのです。

施設長さんは行動するフィロソフィーです。フィロは「愛」、ソフィは「叡知」を意味す

るそうですが、施設長さんの考え方と実践力、リーダーシップ、職員への思いやりによって、同じ法的な施設名でも生活状況は大いに異なってきます。ピーターパンよさようなら、モラトリアムはもう結構、とすばらしい福祉の構築に乗り出された施設長さんにお会いすると嬉しくなります。そのうちでも、とくに女性の開拓精神旺盛な方々の実践力には敬服致します。そして紀貫之スピリットを発揮されている男性施設長さんにお会いしますと、この世に男性と女性がいて本当によかったと安堵します。

「愛」と「叡知」をお持ちの施設長さんは、窮屈な制度や通達に、スピリットを吹き込み、利用者のニーズを配慮して、しかも職員が生き生きと働く職場を作っていらっしゃるのをお見受けしますと、頭が下がる思いがいたします。このような施設長さんはリーダーシップがおありになって、経営手腕が優れていらっしゃるだけではなく、地域の社会資源を取り込み、ないものは開拓し、地域と深いかわりをもっていらっしゃる福祉の実践家ですし、しかも利用者の心を読んで対処してするカウンセラーであって、英雄的な独走はなさいません。サービスを提供する側と受ける側の平等の人権感覚が光っていらっしゃいます。とりわけ人間が生きる姿と生活をしっかりと見つめていらっしゃいます。ご自分も生きることによって一生懸命でいらっしゃいます。

最初の紀貫之スピリットに話が戻ります、平等の中心核である男女の平等思想が基本におありになります。さきほど申し上げましたように、このような施設長さんは女性であったり、男性の場合は、生活実感のある女性が連れ添って施設運営をしていらっしゃいます。広い意味での人権を重んじる施設長さんであれば、ちょっとセピア色の言葉ですが、いわゆる待遇改善を考えておいでなわけです。サービスのパターンも質量ともに時代にに応じて、地域に応じて変容させていらっしゃいま

す。

しかし逆に、私はこんな施設長さんに出会って驚き、失望しました。地方で開催された二日連続の福祉関係のある大会でシンポジウムがあり、シンポジストとして参加したときでした。懇親会の後で、アルコールが入ったこともあってだと思いますが、ある男性の施設長さんが、私の身体的な欠点を上げ連ね、さらにどこまで本気か分かりませんが、「先生、寝ましょ。私強いんですよ、私と寝ましょ。」としつこく誘うのでした。

これってれっきとしたセクシュアル・ハラスメントなのですが、女と見れば、ちょっといいを出してみるような男性にセクシュアル・ハラスメントの意味なんて理解できるわけはなし、酔っ払ったセクハラ施設長の相手をするほど根気はありませんから、私はその場を退散しました。福祉関係者が聖職者でなければならぬなんて申しませんが、この方はどのような施設経営をしていらっしゃるのでしょうか。女性のスタッフは、あの施設長のもとで気持ちよく働けるのでしょうか。

これからの社会福祉が社会福祉であるには、地域を抜きにしてはサービスを考えることはできないわけですが、地域ではさまざまな人権侵害が起こっています。例えば、知的な障害をもつ女性が、レイプされたとか、妊娠させられて施設に戻ってきたとか、という重大な事件です。アメリカのようにアドボカシーも、北欧のようにオンブズマンももちあわせない日本では、福祉領域の人権侵害に毅然とした態度で対処するために施設長さんが果たす役割りは大きいはずです。このような時に、セクハラのままごとをやっていては困るのですが、この話は打ち切って、人権の観点から考えてみたいと思います。

人権の保証のないノーマライゼーションなんて考えられませんし、人権の保証がノーマライゼーションの原理を大切に、ふつうの生活を創造するという関係を肝に命じておく

必要を感じます。先ほどレジュメの3.で「ふつう」が「ぜいたく」と解釈される不合理にふれましたが、最後にいくつか問いかけをしてみましょう。ぜいたくは敵だとか、福祉の特異な世界ではぜいたくであるかもしれないけど、人間の尊厳を保つ生活として考えればごくふつうで、当然であり、ほとんどが人間としての権利、つまり人権の保証であると考えられる事がらを思いつくまに列挙してみましょう。

お父さん、お母さんと一緒に暮らしたいという子どもの気持ちはわがままですか。せめてお父さんか、お母さんと一緒に住みたいという子ども願いはぜいたくですか。

長年住み慣れた我が家に住み続けたいという、介護の必要なお年寄りの願いはぜいたくですか。施設にいて、静かにしたいときに一人になれる部屋がほしいという思いは、ぜいたくでしょうか、ふつうでしょうか。

自分の気に入ったヘアースタイルがしたいという願いはどうでしょうか。福祉カットが福祉の世界ではもっとも流行の最先端なのでしょうか。外出のとき、個人的に付き添ってくれる人がいて、外出したいという願いはどうでしょうか。

ずらっと並んだ駅のようなトイレではなく、数人からせめて10人以内で使えるトイレがあったらいいなという思いはぜいたくでしょうか、あたりまえでしょうか。特別養護老人ホームでカーテンの間仕切りだけでオムツ交換をされるのを拒んだらどうなるでしょうか。

重症心身障害と呼ばれる人達に、訴える力があって、障害をもっているけど、人間としての尊厳があるのだから、人前で、ましてや見学者が通る所でオムツを替えるのはやめてほしい、といわれたらどうしますか。私たち母親は、子どもが幼かった頃、どうしても人のいるところでオムツを替えなければならなくなった場合、部屋の隅などを選び、自分が屏風代わりになって、子どもを隠すようにし

てオムツを替えたではないですか。自分の子どもには排泄に関して細やかな気づかいをするけど、重症心身障害の人にはできないというのはおかしいわけです。

障害の重い人が青年期を迎え、自分も親から独立した生活がしたいと叫んだら、どうしますか。あるいは障害のお子さんのいる親ごさんが、子どものために、自分の残りの全人生を捧げなければならないのですか、と尋ねられたらどうしますか。

毎日昼夜を通して子どもの世話をしていて、心身ともに疲労し切っていて、生きる活力がわいてきませんが、たまには息抜きがしたいのですが、と親ごさんに訴えられたらどうしますか。あなたは障害の子どもの母親なんだから、そんなことを主張するのはぜいたくですと、論ずのでしょうか。そうではなくて、ナイトケアの部分を引き受けるサービスを創造すべく親ごさんと共に頑張るのでしょうか。あるいはレスパイト・ケアのために奔走するのでしょうか。

障害のお子さんや成人の障害者で、自らのニーズを口にできない人は非常に多くいらっしゃいます。これからは人権の時代であるといわれますが、自ら人権を主張できない人々の潜在的な人権侵害を意識し、改善しなければならぬと思います。

お子さんの問題に関しても質問してみましょう。最近では1.53ショックを反映して、一人っ子やきょうだいの少ない子どもがほとんどですが、保育園では縦割り保育を十分に取り入れていらっしゃるでしょうか。女性の社会参加はますます増えますが、保育園では母親が働いているから預かってあげると考えていらっしゃるでしょうか。それだけではなく家庭ではできない保育をしようと心がけていらっしゃるでしょうか。

ダウン症の坊やの親ごさんが一般の保育園に入りたいと望んだら、たいいていの保育園は受け入れて下さるでしょうか、障害児保育の

ためにスタッフに研修の機会を提供されるでしょうか。

最近では外国籍の県民や都民などの人口が増えています。戦前から日本にいらした韓国、朝鮮、台湾、中国のいわゆるオールドカマーの方々も二世や三世の代となっていられっしゃいますが、そのお子さんの祖国へのアイデンティティを、園では大切にしていられっしゃいますか。いわゆるニューカマーと呼ばれる南米のブラジル、ペルー、アルゼンチンなどから日本に働きに来ているの方々のお子さんの保育園入所はどうしておいででしょうか。スペイン語やポルトガル語の分かる職員を配置できていますか。

最後に、結婚はぜいたくでしようかという問いかけをしてみましょう。

知的にハンディはあるけれども、勤務をしていて、ちょっとしたサポートでアパートで自立してやっていけそうな男女が結婚したいと訴えたらどうしましょうか。

障害をもたれた方々の本人参加という当事者の発言の機会が、徐々にではありますが増えてきています。先日こんなことがありました。当事者によるシンポジウムで、知的にハンディのある方数名が自身の意見を表明する機会がありました。このシンポジウムには助言者と称する知的にはハンディのない男性が同席していました。印象に残ったことが二つありますが、そのひとつは、自分のことを精薄と呼ばないでほしいという意思表示でした。もうひとつは、一人を除いてシンポジスト（当事者）の方々が「結婚したい」と言いました。

精薄と呼ばないでほしいという意見には、誰もがレッテル貼りはよくないと反省をするでしょう。ところで知的にハンディのある人が結婚するってぜいたくでしようか。

一般論として、結婚しないと自らの意志に基づいて決定した「結婚しない症候群」の人は独身でいればいいし、白い馬に乗った王子

様を待っている姫はいつまで待っていてもそれが人生でしょう。才色兼備、語学堪能、エトセトラの花嫁を求めている男性はいつまで求人広告を出していたってまったくかまいません。ところが愛しあって、結婚したいと思っている男女がいて、働いていて、ちょっとしたサポートがあれば家庭生活も大丈夫という場合に、どう考えられますか。

このシンポジウムで、助言者は、「夢は夢、現実には現実だから。夢と現実を区別したほうがいいでしょう」とじつに善意の笑みを浮かべて助言したのです。

私はフロアにいて、しかもこのプログラムが本人参加によるシンポジウムでしたから、発言は差し控えざるをえませんでした。腹が立つというよりは、この悪意のない助言が悲しくなりました。だいたいこの本人参加のシンポジストのなかには、結婚して、仕事も家事もこなす、おしゃれな女性が含まれていて、結婚という夢を実現しているのです。助言者が言うように結婚って夢ではないし、ぜいたくではないと私は思います。

このシンポジウムの数か月後に、結婚ってぜいたくでも夢でもないことを確認したくて私は四国まで出かけました。そしてシンポジストでただ一人結婚していた女性の家を、生活支援センターのスタッフと訪ねました。他のカップルたちのスウィートホームにも何軒か伺わせていただきました。ふつうの家庭です。このようなカップルは全国各地で誕生しているでしょう。結婚って、結婚したいと男女が望み、近くに生活をサポートして下さる人がいるなど事情が許せば、ぜいたくではなく、ふつうだと思います。

こんな問いかけをしていきますと、とめどもなく続きますので、ここでやめますが、このように考えていきますと、一般的にはふつうであるはずのことが、福祉という世界ではぜいたく、あるいはわがままときめ付けていることってすごくたくさんあると推測します。

私たちは、いわゆる福祉の対象と考えている人々からふつうをぜいたくだからといって、取り上げてしまっていることにすら気づいていない場合があります。

まとめ

生活が実感できる公的福祉サービスと施設福祉

ですから、レジュメの6.にありますように、生活が実感できる公的福祉サービスと施設福祉を目指し、男女共存可能な福祉を創造し、そして私たちは男女共に利用者になりましょうと、現代の紀貫之さんに呼びかけて、私のお話を終わりにさせていただきます。長時間のご静聴をありがとうございました。

(レジュメの6.)